



—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

イスラエル：新ネタニヤフ内閣の成立

3月18日、イスラエルの新連立内閣が発足した。3月15日、イエーシュ・アティドと「ユダヤの家」が連立合意に署名し、ネタニヤフ首相は、組閣期限最終日の16日にペレス大統領に内閣の成立を報告した。イスラエル国会は、18日に新内閣を承認した。

中規模政党で構成された内閣

内閣は、4党で構成され、議会（120議席）内で68議席を占める。「リクード・イスラエルベイトヌ」31議席、イエーシュ・アティド（未来はある）19議席、「ユダヤの家」12議席、ハトゥヌア6議席である。1月の選挙では統一名簿で選挙戦を戦った「リクード・イスラエルベイトヌ」と「ユダヤの家」は、それぞれ2つの党で構成されており、新内閣は実際には6つの党で構成される。今後、リクードとイスラエルベイトヌが別々の行動を取る場合、リクードは20議席、イスラエルベイトヌは11議席になり、連立の大きな柱となる第一政党が存在しなくなる。中小政党6つで構成される新内閣は、ハトゥヌア以外の政党が単独で連立を離脱する場合でも、少数与党になる。新内閣は、安定した政権ではない。そのため、連立の組み替えの議論がすでに浮上している。

宗教政党なしの政権

与党は、すべて世俗派の政党である。イスラエルの歴代内閣で、超正統派の宗教政党が参加しない内閣は、非常にまれである。新内閣は、神学生の徴兵免除問題や超正統派国民に対する国家のさまざまな支援など、世俗派国民が不満を感じている問題に対処できる状況にある。イエーシュ・アティドの議員が長となる「兵役の平等な負担」を検討する閣僚委員会は、3月18日から45日以内に法案を国会に提出する予定である。新内閣は、イスラエル内政の長年の問題である世俗派と宗教勢力の軋轢を解決できないとしても、新しいバランス関係を構築できるかもしれない。

新内閣は右派政権

イスラエルの政党を右派・左派に区分する基準のひとつは、中東和平問題に積極的（左派）か消極的（右派）かである。同基準では、6つの与党の立場は、中道1、中道右派1、右派1、極右3となり、全体としては、かなりの右派政権になる。右派政権でも中東和平交渉を進めるケースはあるが、東エルサレム、入植地問題などでの立ち位置はかなり強硬になるだろう。

連立合意では、パレスチナとの交渉を再開し、交渉は、中道政党ハトゥヌアの党首であるリブニ司法相が担当する。リブニ個人は、交渉に前向きかもしれないが、内閣全体の立場との温度差が強まる可能性がある。ただ中東和平交渉では、イスラエルの右派が決断すれば、左派は反対せず、国会承認が容易になる。

新ネタニヤフ内閣は国内問題を優先する可能性が高い。神学生の徴兵免除問題、国内の物価高の問題などが組閣の段階から優先課題になっている。新内閣の中東和平問題に対する政策は、米国の影響を強く受けるだろう。その意味で、3月20日にイスラエルを訪問するオバマ大統領の動向が注目される。

(中島主席研究員)